

「モービー・デイク」(ハーマン・メルヴィル) 其三

「鯨の白さについて」と題する有名な章の冒頭、語り手イシュメイルは、モービー・デイクに關して何にも増して自分を「戦慄せしめた」のは「鯨の白さ」なのであつて、その「漠として名附けえぬ恐怖」を説明せねば「この本そのものが無に歸してしまふ」と迄述べて、それが「人類に最大の恐怖を與へる」ゆゑんについて延々と解説した末に、白色から聯想される想念を「宇宙の非情な空虚と廣漠」、「虚無の思ひ」、「無色にして全色の無神思想」、「生氣を失つて癩者のごとくわれらの前に横たは」る宇宙等々と表現し、それら一切を象徴するのが白鯨なのだ、「されば讀者よ、御身はこの狂熱の追跡を異とするであらうか」と結ぶのである。

ドストエフスキーやニーチェと同様、メルヴィルもまた「十九世紀の子、懷疑と不信の子」だったのであり、「神の死」に直面した西洋近代人の「最大の恐怖」が作品執筆の最大の動因を成してゐる。エイハブは云はば「宇宙の非情な空虚」がどうしても許せぬとて「狂熱の追

跡」に驅られるのだ。第九十六章にかうある、「すべての書物の中で最も眞實なる書物はすなはちソロモンの書、『傳道の書』こそは諄々乎たる悲哀の鋼に他ならぬ。『すべて空なり』なのだ。文字通りすべてが。恣意にみちたこの世界は、キリストを知らぬソロモンの叡智を、いまだ擱んではをらぬ」。「キリストを知らぬ」時代の舊約聖書に收められた、ソロモン作とも傳へられる「傳道の書」は、人の世の空虚や非合理の現實に一切の幻想を懐かぬ作者の手になるもので、しかく身も蓋もないリアリズムに徹してゐるがゆゑにこそ、メルヴィルにとつて「最も眞實なる書物」なのであつた。「傳道の書」に限らない。「モービー・ディック」全篇に於て舊約聖書への言及が新約聖書へのそれを斷然壓倒してゐるのは故の無い事ではない。メルヴィルは云はばキリストと無縁の世界の在るが儘を十九世紀の捕鯨の世界に假託して表現したと云つてもよい。然るに、「神々が消えて久しい今日」(第七十九章)なほ、世人は「ソロモンの叡智を、いまだ擱んではをらぬ」どころか、鯨に天使たれと説く類の甘い性善説を疑ひもせず、白色の象徴する「無神思想」に眞向から對峙しようともせずして、便々として知的怠惰の安逸を貪つてゐるとしか思へぬ、メルヴィルは何よりもそれが云ひたかつた。

けれども、アメリカは昔も今も樂天的な性善説を「正統イデオロギー」として信奉する國で

あり、また、巡禮始祖の昔から鞏固な宗教的敬虔の傳統を有し、今なほ輿論調査に於て國民の八〇パセントが神を信じると答へるといふ、西洋諸國家に於てすら頗る「例外的な國」なのである。十九世紀アメリカに於てメルヴィルが孤立し、正氣を疑はれ、讀者を失ふに至つたのは無理ならぬ次第であつた。彼は「モービー・ディック」を三十二歳で執筆するが、讀者の理解は殆ど得られず、無論賣行きも芳しからず、數年後には作家稼業を斷念せざるを得なくなり、後半生の十九年間はニューヨーク港の税關吏として糊口を凌ぎつつ専ら詩作に勵み、借金して僅かに私家版の詩集を出したりもするが、世間からは忘れ去られた儘、傑作「ピリー・バッド」の原稿を遺して七十二歳で世を去つた。

「モービー・ディック」を書く前の事だが、彼は岳父に宛てて、自分が幾つかの所謂「成功した」本を書いたのは單に「懷具合」の爲で、「心の欲する處」ではなく、實は「自分としては『失敗した』と云はれる類の本こそが書きたい」と書き送つた。結局、彼は「心の欲する處」に従ふ道を歩み、壯烈に「失敗した」譯だが、畢竟、それは、「眞理は何者にも囚はれぬ」としてアメリカ社會の自明の理を徹底的に疑つたからに他ならなかつた。

(野崎孝譯、世界の文學セレクション三六、中央公論社)